

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32618

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13062

研究課題名（和文）草双紙史の再構築に関する研究-18世紀の装丁様式からみえる出板活動と享受の実態

研究課題名（英文）Research on Reconstructing the History of Kusazoshi: Publishing Activities and When and How Kusazoshi Was Delivered to Readers as Clarified by the Binding Style of the 18th Century

研究代表者

松原 哲子 (MATSUBARA, Noriko)

実践女子大学・研究推進機構・研究員

研究者番号：70796391

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：国内外の初期草双紙について装訂の整理から初摺と後摺とに分別し、見返し等への当時の所有者の書き入れ情報を紐づけ、情報を整理した。

研究代表者はかつて三田村彦五郎の署名入りの草双紙群を整理し、彦五郎の草双紙購入の時期の絞り込みを試みたが、本研究では初摺本および後摺本の当時の所有者の購入時期についての情報を収集・整理し、草双紙の愛好家（読者）が初摺の新作と後摺の旧作とを同時購入するようなかたちでコレクションを構成していたと想定することが順当であることを確認した。

また、伝本を評価する新たな視点として紙質に注目し、印刷情報からは得られない年代推定の可能性について検討し、一定の有効性を確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

草双紙は大田南畝『菊寿草』の言辞をもとに文学史上の定義が形成され、それが現在も各作品の評価基準として使用されている側面がある。

いわゆる黄表紙登場以前の初期草双紙については、黄表紙に比して素朴で他愛もない内容のものだと認識され、黄表紙の特殊性や優位性を強調する際の比較対象として示されることも多い。

本研究では、草双紙は時代と共に発展・洗練された、刊行時期によって性質が異なるなどの従来の草双紙研究の前提に対して疑問を投げかける点で学術的意義を有する。後摺本を含めた草双紙の流通の実態を踏まえると時代の変化に影響されない、普遍的な性質を持つ存在としての草双紙がみえてくる。

研究成果の概要（英文）： I determined whether the early Kusazoshi in Japan or abroad were printed and sold for the first time or the second time or later, based on the appearance of the books, and organized them with the information written by the owners at that time.

I have previously organized the signed Kusazoshi by Hikogoro Mitamura and attempted to determine when he purchased the books. This research collected and organized information on the time of purchase by the owners of the books at the time of their first printing and sale and those printed and sold after the second. As a result, we confirmed that it is reasonable to assume that lovers of kusazoshi composed their collections by simultaneously purchasing new works from the first printing and old works from later printings. We also focused on book paper as a new research method. We examined whether we could obtain information on the timing of book sales, which could not be obtained from printed information, and confirmed a certain level of validity.

研究分野：日本近世文学

キーワード：初期草双紙 赤本 黒本青本 鱗形屋 題簽 紙質分析 装訂 後摺

1. 研究開始当初の背景

草双紙の文学史上の展開は、いわゆる黄表紙をひとつのピークと捉え、黄表紙を中心に、それ以前とそれ以後の三つに分けて扱うことが定着している。本研究の主な研究対象である赤本および黒本青本は、数十年に亘る諸氏の先行研究によって、様々な作品の存在が示され、詳細な注釈等の研究成果が示され、その実態についての情報はある程度具体的に発信されている。

しかしながら、その一方で、赤本および黒本青本は、草創期から末期までの草双紙の展開の中で、黄表紙の特殊性や文学性における優位性を示す際の比較対象として、素朴なもの・他愛もない内容で文学としての価値が低いものというイメージが無批判に継承されている側面も有している。この、黄表紙誕生以前の初期草双紙が素朴である、子ども向けの他愛もないものであるというイメージは、一次資料(現存する初期の草双紙そのもの)の検証によって成されたものというよりも、大田南畝『菊寿草』の記事をベースに、黄表紙の主だった作品にみえる言辭で補足することによって形成され、定着したものと見える。

研究代表者は『菊寿草』に示され、同時代の黄表紙作品の中で赤本や黒本青本に紐づけられているいくつかのトピック(言葉あそびの多用・題簽の様式や装訂など)について実際の赤本・黒本青本そのものから情報を抽出・整理した。その結果、『菊寿草』の記事は、草双紙の歴史を客観的に整理したものではなく、あくまでも大田南畝個人の草双紙との出会いやその後の読書体験について振り返ったものであったことを明らかにした。よって、『菊寿草』を元として形成された従来の草双紙のイメージや文学史的な定義づけは、大田南畝というフィルターを通したものであり、黄表紙を中心に据え、前後で大別する方法もまた、草双紙を正しく捉えたものとはいえないことについて指摘するに至った。

上掲の検証をした過程で、様々な所蔵機関に存在する初期草双紙の装訂について調査や整理をおこなったが、多くの後摺本と思しき伝本に遭遇した。草双紙は、毎年正月に世に出、その年限りのものとして読み捨てられたというの、黄表紙を中心とした、草双紙に定着したイメージのひとつであり、そのことが先掲の草双紙の発展のイメージを支えた要素ともなっているが、現存する初期草双紙はむしろ後摺本にあたるものが多い。よって、後摺本をも含めて江戸の人々にいかに享受されたのかの実態を明らかにすることが、草双紙の実際の展開を解明することに繋がり、また、そこから草双紙を再評価することが、草双紙を一次資料に基づいて評価することに繋がると判断するに至った。

2. 研究の目的

前章でも述べた通り、研究の目的は一次資料に基づいて草双紙、中でも赤本・黒本青本といわれる初期の草双紙について、後摺本をも含めた印刷・販売の時期を明らかにすることである。これは、『菊寿草』他の、いわゆる黄表紙の時代に生まれた作品群に示される、特定の作者のフィルターを通した、黄表紙誕生以前の草双紙群に対する固定化されたイメージから離れ、一次資料に基づいて草双紙を再評価することを目的とするものである。

内容が先行文芸の抄録を中心としている初期草双紙は、作者の創意による新奇性や時事を踏まえた社会風刺の要素を取り入れている性質がない(弱い)とされている。一方、そのことは、内容が定番的で、時間が経過しても内容が古びず、長く読者を獲得することができた可能性を感じさせるものでもある。例えば、初期草双紙の典型とされる昔話物は、本の形態は変化したとはいえ、今もなお、ほぼ同内容で広く享受され、出版物(商品)としての価値を維持している。それは、草創期の草双紙と現代とを結び、あらゆる年代において、それが読者を獲得し続けたものであることを感じさせる。

本研究では、現存する初期草双紙について、初摺本の刊行時期を整理した上で、それらの後摺の印刷・販売・購入時期に関する情報を抽出し、初期草双紙が新板物として初めて世に出された後も、繰り返し、一部は長い年月に亘って印刷・販売され続けたこと明示しようとするものである。その上で、黄表紙を中心に据えた草双紙評価から離れ、一次資料からみえてくる情報によって草双紙を捉え直すことを本研究の目的とする。

3. 研究の方法

研究の基礎を成す主な方法は以下の三つである。

- (1) 国内外に所蔵される赤本および黒本青本について、表紙・題簽・新板目録・作品に盛り込まれた時事的な情報といった、新板としての刊行年を認定できる要素を抽出し、これらの要素が完備または一定以上備わる伝本の年代推定をおこなう。

特に、新板としての刊行に用いられた装訂とは異なる様式のもの、つまり後摺本としての装訂を持つ伝本を抽出し、それらについては、新板の印刷・販売の後、どれ位の時間が経過した時点で印刷・販売されたものなのかを丁寧に検討する。

その方法の一つ目は、題簽の様式の検証である。研究代表者は刊行年の推定のために、かつて新板目録の情報と、表紙の色や題簽の様式を照合し、年代順に整理したが、その過程で、多くの初摺本の順当な様式の流れから外れ、かつ板元が販売時に施した装訂とみられる伝本

の存在を確認した。それらを、後の印刷・販売時の装訂と仮定し、次項の情報と照合することとした。

- (2) 当時の所有者の書き入れの整理である。草双紙の当時の所有者の中には自分の名前や購入時期、販売店等の情報を書き入れる習慣のあった人物も少なくないようである。特に購入時期についての情報が書き入れられている伝本をみると、新作の初摺本の装訂を持つ伝本は、印刷情報から推定される刊行年と同年の購入であることが確認された。よって、印刷情報から導き出される刊行年よりも後の年月日書き入れられた伝本は後摺本であると見込まれ、これは、草双紙が年一回正月の刊行が済んだところで役目を終える商品で、毎年新たな作品が世に送られ続けた、その時限りの世相を切り取った時事性の高い文学性を持つものとして変質した、といった、黄表紙の特異性・優位性を、黄表紙全体の変質と捉えることが妥当なのかという、草双紙の研究上の課題の存在を再確認するものである。
- (3) 草双紙の本文に用いられた紙質を評価するという方法である。この方法は、本研究を開始した過程で得た新しい視点であり、方法である。先に示したように、一次資料（草双紙そのもの）から得られる一番明確な情報は、文章やセリフ、挿絵から得られる印刷情報であるが、これらはすべて新作として板木を作製した時点のものである。本研究では、一度世に出たひとつの作品が、商品として江戸の人々に繰り返し提供されていった状況、初摺本だけでなく、後摺本の存在も踏まえた上で草双紙の展開を具体的に捉え、その文学史上の評価を改めておこなうことを目的としている。草双紙の本文の印刷に用いられた紙は、基本的に販売するために印刷した時代と結びつくものと想定されるため、本研究における後摺本の展開を具体的に捉えるという研究テーマの検証材料としては、画期的な方法であるといえる。

4. 研究成果

研究成果として以下の三点を示す。

- (1) 板元を限定せず、国内外に所蔵される、条件の比較的揃った（本の保存状態が良く、装訂からの情報が得られる）初期草双紙の観察結果と、かつて鱗形屋を例に、表紙・題簽・新板目録を整理することによって、年代認定や初摺・後摺の別を判断した結果とを比較した、基本的に傾向を一としている。よって、代表的な初期草双紙の板元である鱗形屋板の出板活動を明らかにすることによって初期草双紙の全体像について類推・想定することは一定以上有効であることが確認された。
- (2) 国内外にまとまったかたちで所蔵される、三田村彦五郎の署名の入った初期草双紙群（いわゆる三田村本）について、悉皆調査をほぼ完了させた（公的機関のコレクションの全て）併せて、他の人物の署名の入った初期草双紙についても情報を収集し、三田村本と、他の人物の署名の入った本との間に、大きな隔たりのないことを確認した。三田村本は所蔵者の書き入れが入った草双紙群としては抜きんでて数が多く、まとめて収蔵されるコレクションが複数存在し、かつ保存状態が良いものが多い。よって、三田村本を整理することによって得られる、草双紙と読者との関係に関する情報は、初期草双紙の享受の問題を考える上で、非常に有効な研究材料となることが確認された。この成果については、近く刊行を目指している拙著に盛り込む予定である。
- (3) 本研究の過程で新たに取り入れた、草双紙の本文に使用された紙の性質を観察・評価する方法により、初期草双紙、特に宝暦・明和期の黒本青本の草双紙の紙が、明らかな漉き返し紙（リサイクルペーパー）であることが確認された。その成果については2022年度日本近世文学会春季大会（於中京大学オンライン会場）で発表し、後、『近世文藝』117（2023年1月、日本近世文学会）に「草双紙の本文料紙の紙質——高精細デジタル顕微鏡の観察結果を手掛かりに——」として論文発表した。草双紙の紙が漉き返し紙であることについては、曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』の草双紙について記した記事で昔から知られてきたものだが、その真偽や実態については明確でなかったところも多い。しかし、顕微鏡による紙質観察によって、草双紙が長く、およそ天保期にいたるまで漉き返し紙であったこと、同じ漉き返し紙でも、宝暦・明和のころと、天明ごろでは、紙質が明らかに異なることが明示できる見通しを立てることができた。よって、本研究の目的である、定番の内容の初期草双紙が、長きに亘って繰り返し印刷・販売されたことを、今後一層調査を重ねることによって、紙質から証明できると見込んでいる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 松原 哲子	4. 巻 117
2. 論文標題 草双紙の本文料紙の紙質	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 近世文藝	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20815/kinseibungei.117.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松原哲子	4. 巻 18
2. 論文標題 料紙分析に期待すること	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ふみ	6. 最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 舟見一哉、松原哲子、徳植俊之、田中大士、佐々木孝浩、甲斐温子、古澤彩子、海野圭介	4. 巻 43
2. 論文標題 国文学研究資料館及び橘樹文庫蔵桐尾類切（桂様切）『万葉集』の高精細マイクロスコープによる紙面観察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国文学研究資料館調査研究報告	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松原哲子	4. 巻 98
2. 論文標題 赤本についての一考察 『菊寿草』序文「花さき爺が時代」の意味するもの	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『実践国文学』	6. 最初と最後の頁 57-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002195	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 松原哲子
2. 発表標題 初期草双紙の料紙分析からみえるもの 高精細マイクロスコープによる観察を軸として
3. 学会等名 日本近世文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松原哲子
2. 発表標題 Comparison of Paper Quality Analysis of Kusazoshi and Kyokutei-Bakin's Articles of Kinsei-mono-no-hon-edo-sakusya-burui
3. 学会等名 The Digital Turn in Early Modern Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松原哲子
2. 発表標題 Tracing Bookseller Activity through Microscope Analysis of Paper
3. 学会等名 Association for Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------